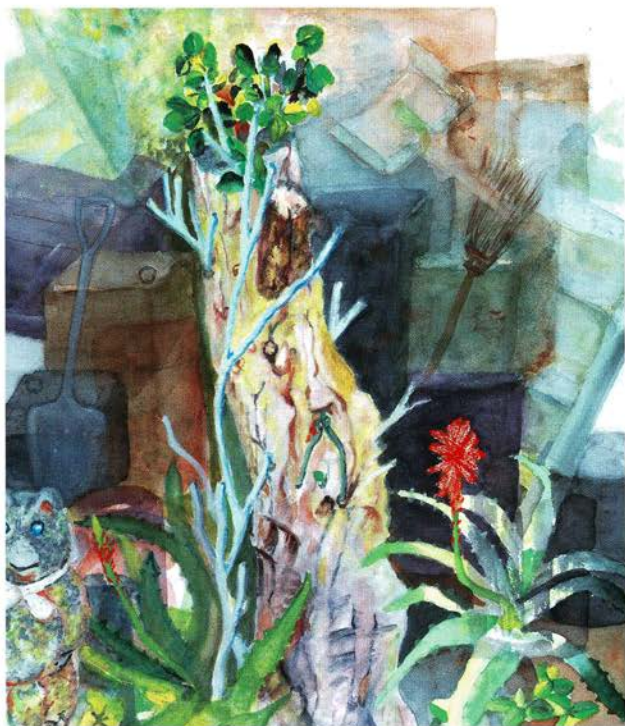


村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)9月号

第98卷

第9号

通卷1089号

二〇二一年(令和三年)九月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第九号



香 蘭

2021年(令和3年)9月号
第98巻 第9号 通巻1089号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(73)	中井房江	表二
	一		2
	二		22
	三		45
	推薦香蘭集		45
	香 蘭 集		53
	作品一特選(七月号)	相川・朝香・石井・伊藤(美)・大井田・大島(保)	54
	作品二、三特選(七月号)	青山(脩)・江口・小原・鈴木(知)・松沢・武藤 安達・田中(あ)・中村(陽)・渡邊(典)・河野	16
	一頁公論(4)『ある青春』	—— 今を生きる	15
	村野次郎への旅(137)	鈴木桂子	18
	令和三年度 誌上全国大会 開催経過および選評	千々和久幸	20
	(選者選発表、高点歌発表、出詠者名、作者名入り詠草)		
	七首抄(七月号)	手塚・牧野・沙阿羅・今井	28
	エッセイ・自由研究「徒然草ミニ」	中島絃子	51
	私の読む現代短歌(9)「まつぶさ」の歌人・宮 柊一	田中あさひ	58
	焦点(七月号)「小さな感動」	香山静子	60
	作品評(七月号)	渡辺礼比子	62
	作品一	武藤昭彦	64
	作品二	庄司健造	66
	作品三	小笹岐美子	68
	香蘭集	田中あさひ	70
	文法あれこれ(28)	村上美智代	72
	緑地帯	馬場美信	74
	明宝研究会第一二〇回六月例会	桜井京子	76
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		87
	歌会及び会合・会員消息・他		92
	編集後記・新宿日記		
	表紙絵	中村 陽子「おしゃべりな木」	
		目次・緑地帯カット	
		和田 和雄	

村野次郎作品 私の愛誦歌(73)

ここよりは声とどかねば会場のかなたに

高く手をあげにけり

『角筈』

手元にある『村野次郎三百首』を、年譜で作歌年齢を確認しながら書き写してみた。自然現象が濃やかに描写された叙景歌、家族を含む人間や小動物を詠った作品など、多くの印象的ななかの、最晩年(昭和五十年作)のこの歌が心にくく響いてきた。

一読、全国大会での全体会の景を思った。当時は今より参加者が多く、会場も広がっただろうから正に、「かなたに高く手をあげ」るしかなくあっただろう。自身の行為をそのまま呟いたような自在な作品でありながら、名状しがたい、ふかぶかとした豊かな味わいに充ちている。『樗風集』巻末記の、「無理に難解な言葉を使用することよりも、寧ろ難解な事象も如何に平易に表現すべきかに務めて来た」とのお言葉が思い出される。

・われここに行倒れにならば巡査来て持ち金なども調ぶならんか (『村野次郎三百首』97頁)
『角筈』209頁、『村野次郎三百首』118頁に収録)

四 選 者 の 作 品

赤い月 平塚 千々和 久 幸

報われぬ努力もあるを紫陽花が石段の上に花ひらきたる

結着のつかぬドラマありてよき水の都の水暮れなすむ

みたいなこと ですませてよいか赤い月登らば封鎖は間近だと知れ

夕陽が丘に夕日の沈む箱庭のような人生が憧れだった

叶わざること身にあるを石楠花がほっこり咲いてお早うを言う

葬儀への参列は友情の外なると同期会幹事より駄目押ししてくる

生きることが嫌になったと言う時がいずれは来ると思えば愉し

わが買いいし帽子を病床の妻知らずいつしか今年の夏が逝くなり

来るものは 東 京 桜 井 京 子

病気ではないと言はれてもてあます眠くてならぬ春の心よ

コーヒーはブラックで飲むといふ友が闊つてゐる夜の片隅に

陽のなかを避けやうもなくやつて来る太き蚊柱来るものは来よ

とほるたび一つ二つと落ちてゐるわかき柿の実そのうすみどり

草むらにだれかを待つて咲いてゐる雨降り花ぞ蜜袋は

約束の場所には咲かず石垣のうへの挨拶すずしさうなり

外来種オオキケンケイギク咲くところ美しければいいのではない
パソコンの縁を三ミリほどの虫いつたりきたり春深みゆく

燕 横 浜 渡 辺 礼 比 子

駅前通路にたたずむ少女子の視線を追えばあつ、つばめの巢

のど赤きつばくらめひゅんとひるがえり母は命を取り留めにけり

二本目のワクチン打てば日常の戻るか それはそれで憂わし

既読スルーしてもされても気にしない 炭酸水のゆるき蓋締む

今日こそは脱稿すべし窓しめて高らかに響らすラ・マルセイエーズ

赤穂義士の墓へと続く石柱に彫れり「巨人軍 長嶋茂雄」

わが愚痴を聞き流したる妹が送りてくれぬ手製タルトを

人生の絶頂期とはいつならん 皆既月食きみと待ちつつ

大 丈 夫 鎌 倉 香 山 静 子

ワクチンの接種受けある会場に「本当に効くの？」と甲高き声

左手はワクチン接種で上がらない でも大丈夫右の手がある

マスクした石の狛犬待つてゐる早く帰らんそろそろ日暮

参道に今日も人の流れなくマスクの狛犬居眠りしてゐる

コロナ禍の街すり抜けて来しわれを石の狛犬迎へてくれる

人の流れ少なき鎌倉はさみしいと誰かが言へり その通りです

ブルー、グレイ、ピンクとマスク揃へるもやつぱり止めよう今日の外出

ウイルスに阻まれて会へぬあの人に今日は楽しい手紙を書かう

作品一特選



(七月号作品から)

丸山 三枝子 選

新刊を買ふ

川越 相川 公子

春川を飛び石づたひに渡る子ら河川敷には菜の花咲いて

若き日の姪に似る娘とみてをれば人目かまはず化粧はじめ

うぐひすの初音聞きつつ友を待つ四月の朝の単線の駅

真間手児奈が水汲みしたとふ池寂びて亀四匹が甲羅干しする

憧れの人にまた会ふ心地してカズオ・イシングロの新刊を買ふ

親バカも極まれるらし子の任地富山の力士の星が気になる

給食を知らないわれが喰みてをり人気メニューと聞きし揚げパン

・五首目の比喩は面白く、六首目の自虐的な自己省察は新鮮である。

鎮花祭

東京 朝香 ふさ枝

広重の版画に残る亀戸の神苑に来て藤浪くぐる

浮世絵の景色に変らぬ亀戸天神スカイツリーを彼方におきて

太鼓橋のほりつめれば藤一色版画の景色の中に入りこむ

鶯鳥の絵馬に托せる願い事重なり合いて風に音立つ

花びらが疫病ともない舞うと言う奈良に伝わる鎮花祭

天満宮で買い求めたる文鎮の小さき牛がわが机でくつろぐ

・三首目下句では、版画の中へ自身を組み込んだことで歌が飛躍した。

雑談

習志野 石井 雅子

三か月ぶり編集室の雑談をおやつのやうに味はつてゐる

思ひ出にさよなら今朝のゴミに出す夫と私のゴルフのクラブ

あの世つてきつと良いとこなんでせう好きな人たちどどん行つて

わが庭の薔薇の二輪を窓に置きこころをピンクに浸して朝

雨脚は橋を渡つてきたやうだ図書館の窓激しく濡らす

この春もわが日は一人称単数現在進行形なり

・二首目では直喩の妙味、五首目では雨の擬人化で読者を納得させる。

黒猫便

川崎 伊藤 美恵子

アマゾンに頼みし本は見も知らぬ人より届く黒猫便で

ベランダのタイルの目地より出でし草の不憫親しも日々に眺める

夢の中に息子が犬大連れ来しが昼ごろひとり犬無しでくる

久々に散歩に出でし夫に添いて歩めば少しこころはなやぐ

若者に混じりて珈琲飲みおれば老女のわれもスタバは癒す

たまゆらに見れば机上の加湿器が最後の息を吐き終えしところ

・六首目の「最後の息」は加湿器が壊れた瞬間と読んだ。寓意を孕む歌だ。

春

川崎 大井田 啓子

春風に髪なびかせて自転車少女三人われを追ひ越す

鶯の声する方へ曲がりゆく人影のなき三叉路に来て

野球場の中にさくらの並木あり柵越しに見る満開の花

生垣につつじ若葉の薺けり空の見えない葉もあるだらう

朝朝の両足指のマツサージ今日は右から始めてみたり

・ツボを外さない詠みぶりの四首目の見逃しがちな視線に立ち止まった。

小さき幸せ

倉敷 大島 保美

カーディガン未だ仕舞わずによかったとつぶやき羽織る花冷えの朝

花好きの母に見せたき梅桜、競い咲きたり卯月命日

竿売りののどかな声の聞こえてきて静もる里は朝かげまぶし

食卓に並べる粗食の手料理も老いの小さき幸せとして

数年振り友との電話で長話し「ほとほとしようね」互いに米寿

・四首目の粗食を幸せと受け入れる姿勢、五首目の方言が心地よい。

赤き手甲

長野 小林 唯見

西遠くアルプス山脈影見せて春がすみ立つうすくはあれど

さくら散り土手を歩けば菜の花が千曲川原を被ふがに咲く

顔覆ひ畑に蜜蜂飼ふ二人ひとり赤き手甲を巻きて

ヒマ人が散歩などしてと思はむ杖ひきしめてまつすく歩く

2Bの鉛筆失せれば身の回り探しに探す老いの執念

・手堅い詠みぶりの四首目の自尊心と五首目の几帳面さに心打たれた。

新緑の聖火

豊中 城 富貴美

〈足袋を脱ぐ足のほてりや…〉真砂女のごと花に疲れてマスクを外す

高らかに鳴く鶯にうながされけふ歩きしは一万二千歩

新緑の丘ゆく聖火を見てゐたる太陽の塔が真つ赤に染まる

コロナとふ疫病に舐へるわれとなり日毎夜毎を家に繋がる

鉛筆をもて定型に嵌めてゆく言葉あそびの私の自爾

卓上のメモ帳、スマホを片寄せて一汁一菜一人のランチ

・不自由な身辺を掬い、身の丈に合った生活を丁寧に詠み親しみが湧く。

鳩羽色

東京 西野美智代

米・芋に換はりし母の道行の鳩羽色こそ忘れたかりしを

初夏の風こちよし亡き夫の杖と二本で交互に進む

起き抜けの白湯は痺れる関節の緊張なだめ染み渡りゆく

あの時も疾づくに負けと分かつてた切羽際まで足掻くつもりぞ

国賓の来日かと視る空港にモデルナ製のワクチンが着く

病みてより書かざりしとて連れ合ひの添書の付く友の十五字

・四首目の独白に籠もる切実な心情に瞑目する、本当のことは心に響く。

さくら花

倉敷 宮原 迪恵

前を行く孫の背中にさくら花ひとひらふたひら蝶のごとかり

しろじろと咲いて枝垂れる桜花おのれのために咲いているのか

ポスターと同じ白鳥が川の面をゆつくり泳ぐ倉敷川は

整然と机上に並ぶノートとペン辛抱強くわれを待ちおり

気の抜けたラムネのような日もありて笑っているか庭の山鳩

・二首目下句のあけすけなもの言い、三首目のユーモアを味わいたい。

作品二、三特選



(七月号作品から)

千々和 久幸 選

〈作品二〉

ことばの積木 米子 青山 侑市

歌を詠む神経回路は眠らせて酒まろやかに拡がりゆけり

歌詠むはことばの積木が行き戻り積みては崩し崩しては積む

たけのこの到来ありて今年また金山寺味噌のお返しをする

食ぶるに大きにすぎる筍に合わせて飲むか熱き焼酎

古傷は瘡蓋かさねとなり剥げぬまま身にあり空しく老いてゆくらむ

・自らへの問いかけのある歌がいい。三首目は著休め。

桜満開 柏江 口絹代

なつかしい記憶に吸われゆくような不思議な感じ 右目が眠い

ぐだぐだの私を癒すあんばんを左脳がやめろと言うときがある陸

橋を二つ渡れば駅向こうに桜満開の小学校がある

桜色に染まりてゆける丘の上の中学校に昼が来ている

「バゲットを一本買うと嬉しいの、二分の一本は淋しくてねえ」

歩くことが嫌いな我を励まして散歩好きなる房子さん元気

・奔放・多彩が持ち味。歌材に窮すれば房子さんが登場す。

冬の夕陽 鎌倉 小原裕光

蟋蟀の鳴きははじめたり草叢の小暗き中に家族あるらし

黒雲を熾火のごとく輝かせ冬の夕陽は沈まんとする

春風に若葉そよがすアカメモチ消防署裏に炎をゆらす

昨夜の雨に咲いておりしか月下美人朝の庭に項垂れている

リーダーに迫る雨雲見て思うおおらかなりしよ昭和の予報

さくら色の小さき自転車添えられて玉縄桜の苗木植えらる

・丁寧な銜わずに詠んで歌境の深まりを感じさせる。

富士を眺む 笛吹 鈴木 知良

野田藤の種子まきて十年この三月初花咲くを漸くに見る

リハビリにバイクのペダル踏む日課葉桜が初夏の風に揺れをり

鰯いわしを今も忘れずに送り来る昔お世話になりし下宿屋

大月の友も大富士眺めるむ今日の石和は雲一つなし

富士に近き村なれど富士の見えぬ村明日見村とぞ明日は見ゆるか

大富士を囲む麓の村々は富士に拘はる名称あまた

・屈託なく詠んだ解放感。三首目のドラマ、五首目のウイットに注目。

資格取得 さいたま 松沢 みどり

今年度の課の目標はそれぞれが資格に挑戦すると決まりぬ

宅建士の資格取得をすすめられ本屋で二冊のテキストを買う

仕事で得た知識はほんのひと握り本の厚さに気が遠くなる

合格すれば資格手当が出るという結局わたしはお金が欲しい

昼休みはさつさと食べて宅建士のテキストを開くにやがて眠りぬ資格を取った先には何があるのだろうか。夜中にめくる民法の本
・一途さが歌の熱量を上げた。四首目は直截に言い切つて愉し。

玉川上水

西東京 武藤 昭彦

吉祥寺まではバスにて十五分メガロス歌会がぐんと近づく
会ったことなき「香蘭」の会員が半分はいる十六年目
凍りつく一夜照らして富士ヶ嶺に白々とある有明の月
通勤の男バランス崩し行く持つべき右手に何にも持たず
早き瀬の玉川上水の辺に佇てる太宰の額の皴ふかきかな
打ちやまぬMRIの轟音に越後のふかき雪を思えり
・雑然と詠んでいるようだが、歌の勘所は押さえている。

〈作品三〉

花は移る

島根 安達 恵子

滝の如しだれ桜の咲き居るも三日もすれば色あせて来ん
買物に行く路々に咲く花は桜に代わりて花桃となる
朝食は都忘れにエビネ咲く藤棚の側に置かれたる椅子
先ずえび茶白に黄色と数え足すエビネ数える楽しき季よ
・花に囲まれた心弾みを軽やかに詠んだ。

廃屋の門

取手 田中 あさひ

かなしみにふさがれてゐた及の耳 けふ鶯の初音をひろふ
鶯を人をよびとめ白梅のはな咲きにはふ廃屋の門
これはこれは〈露の臺〉とはいひがたし廃屋の庭にみな蓬け立ち

ほろほろほろ木通の苔はうまれつぐ永遠なんぞどこにもないが
われこそはアヤメ科著我よと名のりいづ苔はながき首をのぼして
・四首目の下旬、自らの殻を破ろうとする試みと読んだ。

「川甚」閉店

東京 中村 陽子

柴又の「川甚」閉店コロナ禍のせいにはしないと店主が泣いて
子が生まれ子が妻となり母となりその度行きし「川甚」閉店
スマホ越し励まし合いぬコロナ禍の東京のわれと大阪の友
デッサンのモチーフとして置かれたる角持つ鹿の頭部の剥製
うっせえうっせえAdoの歌うYou Tube再生二億回越える
・思い入れを抑えスマートに読み熟した。五首目はサーピス。

花 虻

鎌倉 渡邊 典子

ほのかにて藤にはふ日は花虻の翅音の曳く細きアダージョ
風絶えてかりそめのごと花の散る源平池に浮かぶ人の名
上空の鶯や見らむ庭隅に春菜を間引く老いびとの背を
またひとつ「テナント募集」か鎌倉の大路に鳩がツイと歩を止む
・身についている美意識が前面に出て納得の歌。

あこがれに似て

鎌倉 河野 慎二

酔ふまへに付ける日記よ大抵はけふの値打も知り得ぬままに
手の届きさうな夜空を見上げをり嘆くすがたはあこがれに似て
胸深く膝を抱へて庭ささきの薔薇の匂へる甘美なる鬱
・一首目、理の窮屈さ、二首目、文学少年的、三首目過剰。頑張れ！

「香蘭」創刊号を読む（四）

千々和久幸

「香蘭」創刊号の出詠者で、わたしの記憶にある歌人の作品に一通り目を通しておきたい。わたしの「香蘭」の記憶は昭和三十年（1955年）に始まる。

先月号で中河与一の作品を読んだが、同じ欄のすぐ後ろに深野庫之介「山すそ」九首、石野正太郎「残雪」十二首、池上秋石「そのをりふし」五首が並んでいる。

深野庫之介、石野正太郎は後に「香蘭」選者になったが、池上秋石は新宮市（和歌山県）にあって、関西の諸支社の指導的立場にあった。ついでに記せば池上は一時期、野球で名高い新宮高校の野球部長（監督に非ず）でもあった。

山すそ

深野庫之介

①雲こむるこの山すそに家あらむ雑なくこゑののどにきこゆる

②雲こむるこの山すそのなりはひに安けくあ

らむ少女等を思ふ

③此宵また眠りにつけず耳鳴のよべにもまさりくるしくおほへて

④雪の夜を獨りぞいぬる夜の闇けをまた耳鳴のおこりて来るも

⑤戸の外に金柑の葉につむ雪の江りたるらし夜ふけしゝまに

⑥夜のふけて金柑の葉につむ雪のすべるけはひはさやかなるかも

⑦酔ひざめのわびしさをたへまじまじと口には苦き煙草をのむも

⑧心ぐ、帰れるわれをむかふるとかほをならべて笑まふ子等はも

⑨たらちねの母にしあればいそいと迎ふるものかそむけるわれを

おおかたは身辺雑詠とも言うべき一連だが、そこに暮らしの周辺の雑や少女を配りまた自らの心情をも重ねて、それが一首の彩りになっ

ている。

①の「のどにきこゆる」は「閑・和」にきこゆる」である。ここでは雲が立ち籠める（籠）る（ど）彼方の山裾にある家から、鶏のなく声が閑かに聞こえてきたというのだろう。「のど」は万葉集時代の表現である。

また⑧の「心ぐ、」の終止形は形容詞「心ぐし」で「心が晴れない。心が切なく苦しい」の意、広辞苑の同項には、用例として万葉集（4）の「春日山霞たなびき心ぐしく照れる月夜にひとりかも寝む」が引かれている。

⑧は、形容詞ク活用の連用形は「心ぐく」とすべきところを「心ぐ、」と誤記されたものだろう。

歌意は「作者は」切なく遣り切れない思いを抱いて帰宅したのだが、子供たちはいつものように無邪気な笑顔で迎えてくれた」で、作者はほっと救われた思いの中に、いくばくかは子等への負い目も感じられる。その微妙な心理が終助詞「はも」の詠嘆に籠められている。

③④⑦⑨などを読むと、作者の暮らしがけつして安穩なものではなく、なにがしかの鬱屈を抱えていたことが窺える。

作者の深野はわたしが「香蘭」に入会当時

は札幌在住だった。間なく選者在任のまま夏の全国大会(千々和は欠席)の席上、突然退会を告げ、武市房子ら選下の会員と共に「香蘭」を去って新たな結社を興した。

その経緯は今日に至るも明らかにされていない。歌人の離合集散は結社の常だが、同じ過ちを繰り返さないためにも事実を正しく受け止め、運営に遺漏なきよう期したい。

残雪

石野正太郎

⑩通り風吹き過ぐならし松の葉につもれる雪の粉に散れる見ゆ

⑪雪解けてとひ流れゆく昔忙し晝餉食しつづつ、なるかも

⑫陽の光はや、に傾き軒端なる垂氷するどき光りとなれけ

⑬け並べて日和定まらず残雪今日の南風に多かた解けけり

⑭枯枝に止まる雀のかげゆれて厨屋に人の聲なかりけり

⑮こもり居る障子明るし軒に来て雀しきりになく聲せわし

⑯巣ごもらう雀なるらし夕暗き軒にかすかな音たてて居り

⑰吾が行くやうら山松は音にひそみただ直立

の肌の明るさ

⑱足低の浦音にはなれて心安し浸る身ぬちにゆるびをおぼゆ

⑲うら山の月光さむし夜をこめて許多過ぎ行く雁の聲すも

⑳梅ヶ枝にした、る雨のしづくして砂地に落ちる音のかそけさ

㉑端近く置きし火鉢の瀬戸の胴に今朝の碧空うつりてあるも

石野の一連は叙景歌で占められているが、

景物の細部にまで目を凝らしているといった詠みぶりである。それだけに作者の暮らしや表情は表には現れてはこない。

だがわたしはその細部の些細な表現に足を取られ、ひと息に読み下すことが出来なかった。それはわたしの知識不足によるが、あえて弁明をすればわたしはこの時代の感受性(時代意識)が体感出来なかったことによる。一

連ですんなり読めたのは、⑩「通り風吹き過ぐ」、⑳「梅ヶ枝にした、る雨の」くらいで、

他の作品はいずれも煩雑さが先に立ち十分に意を汲み取ることが出来なかった。

①の三句「昔忙し」は「音忙し」の誤植であらう。また⑫の結句「なれけ」は「なれり」

の誤植か。また⑭の「厨屋」は手元の辞書にはないが、厨房であることは間違いない。読み方は「ぼうおく」とでも読む他はなからう。

さらに言えば⑰の初句は「吾が行くや」と読むのか、「吾が行く」と読むのか、区切りが異なってくる。まさか「やうら山松」はあるまいが、固有名詞と読めばそのまま読み過ごすことにもなる。

⑱の「浦音」は湯の湧く音と意味は解るが、さて読み方は「ゆうおん」か「ようおん」でよいものかどうか。

⑲の「許多」は「数の多いこと。多数。あまた」の意だが、広辞苑、新明解国語辞典では「きよた」の読みしかない。後者では「古い表現」と断りが付されている。「あまた」と読ませるのは「数多」「許多」を載せている明鏡国語辞典である。

ことほど左様にわたしはこんな(考えようによつては)瑣末な部分に足を取られて、読む意欲を失いかけたのだった。

ついでに記せば踊り字の多用である。深野作品の⑤「しよま」、⑧「心ぐ」、石野の⑫「や、に」、⑳「した、る」など、わたしにはいささか小うるさく感じられた。